

日本SOD研究会報

特集 愛飲者インタビュー

陣痛促進剤の副作用？
娘を重度の
アトピー性皮膚炎から
救ってくれた食育とSOD

神奈川県にお住まいの大橋恵さん(54歳)

発行元 日本SOD研究会 宮城
住 所 〒158-0094
東京都世田谷区
玉川 1-15-2 B 棟 2802
TEL. 03-5787-3498
協力：株式会社丹羽メディカル研究所
<http://www.niwa-medical.com>

今から20年ほど前のことでした。

神奈川県にお住まいの大橋恵さんは近所の病院の婦人科で出産を迎えようとしていました。彼女にとって3回目の出産でした。これまで二人の息子を出産していましたが、お産に大きな不安はありませんでした。体調も良好でした。夕方に陣痛が始まり、その周期が早まり、徐々にその時が近づいてくると思っていました。これまでの経験でいくと明け方に出産だと思っていた。実際、2人の息子は、同じ状況で明け方に生まれていました。

ところが、今回は、入院した時から様子が違ったのです。入院するなり分娩室に入り、先生が現れました。そして待機していた看護師さんに、横文字の薬が何かの名前をいい、それを投与するよう指示して、そのまま部屋から出ていきました。恵さんにはなんの説明もなく、出て行ったのです。彼女は急に不安になりました。自分の出産に何か問題が起こったのだろうか。看護師さんに恐る恐る聞いてみました。

てみました。

「大丈夫ですよ。ちょっと赤ちゃんが早く出てくれるように、陣痛促進剤を投与しますね。先生の指示ですから心配ないですよ」

心配ないと言われたので薬の点滴を受け入れました。しばらくしてまた先生がやってきました。看護師さんに「まだか？」「じゃ今度は〇〇〇を投与して」僕がいる間に産ませてしまおう」などという会話が聞こえてきたのです。恵さんは医者最後の言葉に耳を疑いました。

「産ませてしまおう」ってどういうこと？ 意識が遠くなるような陣痛のなか、反論もできずにまた点滴の投与。覚えていただけで3種類くらいの点滴を投与されたのです。その中には強い痛み止めも入っていたそうです。

そうして出産は夜中になることなく、おそらく先生の勤務時間内に済みました。大橋家にとって初めての女の子が生まれたのです。

20年前の出産、これが恵さんの悪夢の始まりでした。

僕がいる間に産ませよう 陣痛促進剤が常用だった 20年前

「その時に出産した娘は全身に湿疹ができた状態で生まれてきたんです。そのうえ、私自身も出産後、腹痛や腰痛がひどくて起き上がれず、1か月間寝たきりでした」

病院では、お子さんはアトピー性皮膚炎。赤ちゃんにはよくあることです、大きくなったら自然に治りますよと言われ、母体の状態も、疲れとストレスだと言われたそうです。陣痛促進剤の副作用ではないかと疑ったものの、当時は自分と娘のことではいいっぱい。副作用をどうやって実証するのかもわからなかったといいます。「主人は出張が多く、ほとんど家にいない。出産のときも海外に長期で行っていました。そりゃ、心細かったです」

陣痛促進剤の薬害について、20年ほど前はどのような状態だったのか調べてみると、厚生労働省のHPのなかにくつつかの訴訟が起

きた事実が記載されていました。ちょうど看護師の過剰労働や婦人科の医師不足が叫ばれ始めた時でした。当時の新聞（朝日新聞）にそのことがニュースになっていました。

「僕がいる間に産ませよう」

と言って陣痛促進剤を投与することとは日常的に行われていたのかもしれない。今は、お産が長引いていて母子ともに体力の消耗が激しい場合、予定日を大幅に過ぎている場合、赤ちゃんの状態が良くなく、早く出産したほうがいい場合、などのガイドラインが徹底しているといいます。しかし20年、30年前はガイドラインも曖昧だったかもしれません。

いずれにしても恵さんは生まれた時からアトピーのお嬢さんを抱え、苦難の20年を過ごしてきました。

「小さい頃は本当に大変でした。顔中から膿が出ていて、もうぐしゃぐしゃ。かわいそうで仕方なかったです。もちろん、いろいろな病院を渡り歩きました。でもね、ど

こに行っても全部いっしょでした。大量のステロイドを処方されるだけ。こんなにステロイドを塗ったり飲んだりして大丈夫かなって、誰でも思いますよね。かといって使わないとかゆくてかきむしってしまう」

完全にアトピー難民だったという恵さん。病院や薬に対する不信感は募るばかりだったと言います。その絶望感と疲労感はいかばかりだったことでしょう。

「娘の小さい頃の写真が一枚もないんですよ。ひどすぎて撮れなかった」

とつぶやいたそのひとことがすべてを物語っていました。

そんななか、一筋の光が見えたのは、知り合いから、食養内科という内科のことを教えてもらったときでした。お嬢さんが10歳頃のことでした。

「そのクリニックでは、薬を一切処方しないんです。食事指導がすべてなんです。まず、横文字のものは食べてはいけないと言われました」

横文字の食べ物と言えば、ラーメン、ハンバーガー、チョコレート、ケーキ、ポテトチップスなどなど。カタカナの食べ物イコール子供が大好きなものはかりです。

「油も砂糖も小麦もダメで、かわいそうでした」

しかし、もう頼るところはそこしかなかったという恵さん。先生の教えを忠実に実践したのです。そうしたら、1か月で膿がなくなり、数か月するとかゆみも引いたので



「嬉しかったですね。やっぱり薬は怖いものなんだと確信しました」

以来、病院や薬には不信感しかないという恵さん。長い長いトンネルからようやく抜け出た気分だったと言います。

「娘の肌も1年くらいですっかり生まれ変わり、食養内科の先生からはたまには毒を入れてもいいよってお許しまでいただいたんです」

誕生日やクリスマスにはケーキやお肉も食べられるようになったそうです。

アトピーで悩んでいる人に 教えてあげたい薬害の怖さ

大橋家にようやく平穏な日々が訪れ、恵さんも3人の子供たちとあわただしい日々を過ごしていました。しかし、薬害や長年の薬の服用はそうは簡単に体内から抜けることはなかったのでしょう。

「しばらくは治まっていたアトピーが、気候の変化や受験など、ストレスのかかる時期になるとやはり

ちょこちょこ出てきたんです。でも、もうステロイドなどの薬は使いたくなかったんですが、かゆみには使うしかなく、少しでも市販のかゆみ止めを使い始めたんです。使いながら、また元の木阿弥になるのでは、という心配は抜けませんでした」

そんな時に、アドバイスしてくれたのが近所の無農薬にこだわるお米屋さんでした。そこでアトピーや薬の副作用にはこれしかない、と言って勧められたのがSODでした。

「自然の生薬でしたし、資料や著書などを拝見し、丹羽先生が、がんだけでなくアトピーの治療実績もすごいことを知って、これなら安心して飲ませられると思いました。食事療法ですっかり治ったと思っていても、身体の芯から薬が抜けることは、なかなかないんですね」

SODを朝晩5包ずつ、一日に10包飲み始めたそうです。「そしたらすぐに娘の体から化学薬品のニオイがしたんです。ステロイドを少し使ったから、好転反応

で出たんですね」

そのニオイは市販の塗り薬を止めてもしばらくは続いていたとか。

そのお嬢さんも昨年春から大学生になり、一人暮らしを始めました。母として一番心配なのは食生活です。おそらく外食も多いことですから心配は尽きません。

「でも、SODのおかげで、以前のようなひどい状態にはならず、すぐに治まるようになり、娘もこれがあれば安心と言って帰るたびに持っていくきます。SODは我が家の安心の元です」

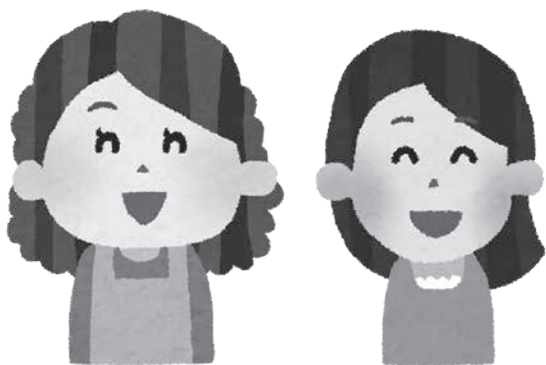
そうおっしゃる恵さんも、

SODを飲み始めたそうです。

「私は介護施設で働いているのですが、ここ数年疲れやすくて年のせいだなと思っていたんですが、SODを飲み始めてからすごく体調がいいんです。体中から悪いものが抜けたのか、むくみがなくなりズボンのサイズがワンサイズダウンしたんですよ。かぜもひかなくなりましたし、なにより身体から、だるさがなくなったのが嬉しい発見でした」

昨年の夏は猛暑で周りのスタッフはみなさん体調を崩していたそうですが、恵さんだけは元気だったとか。

「ありがたいですね。これもすべて食養内科と、お米屋さんとのSODのおかげです。私たちはこうやっていい出会いができましたけど、薬害やアトピーで困っていたら、しゃる人はたくさんいると思います。そんな人たちにこんないいものがあるんですよ、薬は本当にいけないんだということを教えてあげたいです」



丹羽療法
レポート

『オプジーボ』は

本当にがん治療、夢の新薬なのか

丹羽先生のインタビューと
最近の雑誌特集から読み解く

去年、京都大学の本庶佑教授が

ノーベル医学・生理学賞を受賞したことは記憶に新しいと思います。

同時に免疫療法という言葉やオプジーボという薬の名前も耳にすることが多くなりました。オプジーボはがんに対する夢の新薬、という触れ込みもあり、2016年の厚労省の認可以来、注目のがん治療薬でした。今回のノーベル賞受賞でその期待はさらに大きくなっています。

丹羽先生も、数年前にこの薬の噂を聞き、喜んだそうです。〃抗がん剤に代わるがん効く薬ができたのなら、これで私の役割は終わった。ようやく肩の荷を下ろせる〃

と思ったそうです。

「ところがそうではなかった。やっぱり駄目なんです」

以前、インタビューでこのように語り、がっかりされていました。

今回、改めて、このオプジーボと免疫療法というものを丹羽先生の最新インタビューをもとに紹介したいと思います。

免疫療法とは

免疫チェックポイント阻害薬とは

その前に免疫療法とはどのようなものか簡単に説明します。(以下国立がん研究センターのがん情報の記事より)

私たちの体は、発生したがん細胞を免疫によって排除しています。自分の体の細胞ではないものを異物とみなします。細菌やウイルスなどは異物の代表例ですが、体

は異物の侵入を防いだり、侵入してきた異物を排除したりして体を守る抵抗力が備わっています。この仕組みを「免疫」といいます。インフルエンザワクチンなどの予防接種はこの仕組みを利用しています。「免疫」で中心的な役割を果たすのは、血液中の、免疫細胞のひとつである白血球です。白血球と、白血球に異物の情報を伝える役割をする樹状細胞を総称し、免疫細胞と呼びます。免疫はいつも同じ状態ではなく、異物を排除するために強まったり(アクセルがかかる)、強まりすぎたときには弱まったり(ブレーキがかかる)しています。

がんの免疫療法とは、この免疫本来の力を回復させてがんを治療する方法です。私たちの体は、体内で発生しているがん細胞を免疫により異物として判別し、排除しています。しかし、免疫が弱まった状態であったり、がん細胞が免疫から逃れる術を身につけて免疫にブレーキをかけることがあり、免疫が弱まったりする。それによ

りがん細胞を異物として排除しきれないことがあります。免疫療法は、私たちの体の免疫を強めることにより、がん細胞を排除する治療のことなのです。免疫療法は現在がんの治療で広く行われている外科治療、化学療法、放射線治療に続く治療法として期待され、研究開発が進められています。

免疫療法の薬、免疫チェックポイント阻害薬というのがオプジーボなどの新薬です。では、その免疫チェックポイント阻害薬とはどのような仕組みなのでしょう。

私たちの体は免疫により異物を体から排除していますが、一方で、免疫が強くなりすぎると自己免疫疾患やアレルギーのような病気になるので、自らの免疫反応を自ら抑制する仕組みも備えています。しかしがん細胞は、この免疫を抑制する仕組みを利用して、免疫による監視から逃れていることがわかってきました。がん細胞は、細胞表面にタンパク質でできたアンテナを出して、免疫細胞(T細胞)の表面にある〃免疫チェックポイ

ント」という「異物を攻撃するな(免疫を抑制せよ)」と命令を受けとるタンパク質(受容体)に結合して偽のシグナルを送り、免疫細胞ががん細胞を攻撃しないようにします。

そこで、がん細胞が免疫チェックポイントに結合しないようにすれば、がん細胞の周囲にある免疫細胞が、がん細胞を攻撃しやすくなるのではないか、という考えから「免疫チェックポイント阻害薬」が開発されました。

ここまで読んでくれば、なんとも理想の開発ではないかと思うのですが、

丹羽先生は、

「人間の体というのは非常に複雑にからみあい、絶妙なバランスでできている。一か所の一部分の悪いものを薬で排除すれば、バランスが崩れ、副作用という見返りがくる。ましてや人間の細胞はちょっとした環境の変化や(公害など)、心の変化(ストレスなど)、生活習慣(食生活、運動)などでどんな変化していくもの。ひとつの薬

でなんとかできるものではない」と言っていました。

どんな副作用がいつあらわれるかまだわからない

(以下 国立がん研究センターのがん情報サービスの記事より) これまでの研究では、残念ながらほとんどの免疫療法で有効性(治療効果)が認められていません。現在、臨床での研究で効果が明らかにされている免疫療法は「がん細胞が免疫にブレーキをかける」仕組みに働きかける免疫チェックポイント阻害薬などの一部の薬に限られ、治療効果が認められるがんの種類も今はまだ限られており、ほとんどの免疫療法は研究開発中です。なお、新しい薬や新たに保険診療として認められたがんの種類では、どのような副作用が起きるかわからないことから、より慎重に使用されます。

免疫療法(効果あり)ではすぐに治療効果があらわれることが多

いのですが、場合によっては治療の開始からがん細胞への免疫の機能が高まるまでに日数がかかることがあります。治療を開始してから数か月後にがんが小さくなる場合や、一部の患者さんでは免疫療法(効果あり)を終了してからも治療効果が長く続く場合があることがわかってきました。そこで、化学療法とは別の効果判定の考え方が必要とされ、免疫療法(効果あり)の特性にあった効果判定の基準が検討されています。

現在までのところ、標準治療となっている免疫療法(効果あり)についてもすべての患者さんに効果があるわけではなく、一定の割合の患者さんに効果があることがわかってきました。免疫療法(効果あり)が、どのような患者さんの長期の生存につながるかどうかについては、まだまだ多くの時間をかけて研究する必要があるとされています。

認可承認時と現在では治療結果に違いが

つまりは、免疫療法というのはまだ開発途上のもので、認可されたオプジーボに関しても、一部の患者さんにのみ有効だと。そして、それがどのような患者さんに有効か否かはまだ解明されていないということです。その報告に呼応するように雑誌「サンデー毎日」が昨年末に数回にわたって「オプジーボはがん特効薬か」とした特集を掲載していました。

記事によると、確かにオプジーボの開発は、本庶教授が受賞後の講演で「今世紀中に「がん死」はなくなる可能性も——」と自負するように画期的なことだ。早々に保険適用になり、患者からも「万能薬」であるかのように受け止められている傾向がある。と前置きしたうえで、しかし、と疑問符を投げかけています。

その疑問のひとつが、本当にオプジーボで人の免疫システムはよみがえるのかということです。

「最近の知見によると、がん細胞は免疫細胞の攻撃能力を無力化するとともに、樹状細胞(免疫システ

ムの司令塔の役割を持つ細胞)の命令能力まで無力化してしまう。だからオプジーボががん細胞による免疫細胞の無力化を解消しても、司令塔がダウンしたままでは、免疫細胞が十分に攻撃能力を発揮できるか定かではない」

といいます。さらにもうひとつ

の疑問が、保険承認後の製薬会社が公表した、進行期の非小細胞肺がんの患者を対象にしたデータです。それによると、抗がん剤を投与された患者とオプジーボを投与された患者では、生存期間にほとんど差がないどころか、抗がん剤のほうが生存期間の割合が高かったという結果になったということです。

この結果は、肺がんだけではなく、皮膚がんの一種、悪性黒色腫(メラノーマ)でも同様だったそうです。

「承認時に比較試験で有効性が肯定されたからオーケーと考えるのではなく、承認後の比較試験で有効性が否定されたらノーグッドと考えるのが科学的な態度といえるの

では。しかし、日本の薬事行政の歴史を見ると、厚生省がいったん与えた承認を取り消すことはほとんどない」

最後の疑問が、副作用です。このことは丹羽先生も懸念していたことでした。その一部を記事より紹介すると、

「製薬会社からオプジーボの保険適用から1年半後の2016年1月に緊急警告文書が医師らに配布されています。その文書には、糖尿病患者への注意喚起として本剤の投与により、劇症1型糖尿病があらわれ、糖尿病性ケトアシドーシスに至ることがあります」と書かれています。劇症1型糖尿病は、膵臓にあるインスリン産生細胞が免疫細胞によって破壊されることで発症します。その結果、患者はインスリンの不足状態からケトアシドーシス(重篤な合併症)に陥り、多くの患者が死亡してしまいます。やはりオプジーボは今はまだ人の免疫システムに重大かつ深刻な影響を与えるのではないか」というのです。

副作用といわれるものは、肺がん患者にも多くみられるとか。肺がんに対する臨床試験が行われていた病院の試験担当医が「臨床試験中に患者が急死してしまうことが頻繁にある」といったそうです。「その場合の死因は、副作用ではなく肺がん死として報告されていく」と。さらに医師は「抗がん剤の臨床試験でも副作用ではなくがん死として処理されてきたから同じだ」と言ったそうです。

記事は最後に

「オプジーボを投与した場合、なぜこれほど重篤副作用や副作用死が出してしまうのか。免疫学者たちが口をそろえているのが、免疫暴走」ということばである。某免疫学者は、免疫細胞はウイルスなどの外敵を攻撃しますが、外敵でない自己を攻撃し始めると大変なことになるという」

これこそ丹羽先生が長年研究、治療してきた自己免疫疾患による膠原病(リウマチ、全身性エリテマトーデス、ベーチェット病など)に通じるものです。

化学薬品による

生態系を崩す開発合戦はええかげんにしておけよ！

これらのことを踏まえて丹羽先生に話を聞いてきました。

——先生、ここにきてまたオプジーボが話題になっていますが、先生が以前に副作用が心配だとおっしゃっていた通りになっているようです。

「免疫療法の副作用は、怖いという意味では毒ガスが原型の抗がん剤といっしょです」

——どうしてそうなるのでしょうか。
「やはり人間の免疫機能を攻撃してしまうのが今の免疫療法だから、怖いですよ。がんへの新しいアプローチとしてみんな盛んに研究しているのはいいが、免疫をいじると大変なことになるとも知っておくべきですね」

——手術、抗がん剤、放射線に次ぐ新しい治療法として、今、なんでもかんでも免疫と言っています、どうしてそこにいくのでしょうか。

「ノーベル賞というのも大きいけど、免疫療法というの聞こえがいい。なんか新しくて体に負担が少なそうないものができたように聞こえる。それがいい。それは竜宮城ではないんです」

——厚生労働省はどうしてこんなに早く認可をしたのでしょうか。

「世の中が、抗がん剤は百害あって一利なしとか、やっても意味がないということを知り始めたんです。そうすると他に抗がん剤に代わる新しいものが必要なのです。

新しいものを認可していかないと何もしていないように見えて叩かれる。少しでもいいものが出たら認可するしかない。ましてやノーベル賞を取ったら認可して正解だったと喜んでいいますよ。しかし、早すぎた認可のせいで苦しんでいる患者さんとその家族がいることを知らなければいけない」

——病院や医師たちには使用に関する注意喚起がなされているようですが、私たちはまったくわかりません。

「そうです。さらに抗がん剤と同じ

で、オプジーボなどの免疫療法も副作用で亡くなっても、がんが亡くなったことになるんです。副作用の立証をしないからわからないんです。医者には、あなたはがんです、効く可能性は20%ですが、新しい薬を試してみますか？と言われて試して、苦しんで死んでいくんです。もうそういうのはやめたほうがいい」

——でも、免疫療法に期待がかかっているということは、これからも推進されるのでしょうか。

「雨後のタケノコのように免疫と名の付く治療法や薬が出てきますよ。言っておきますが、人間の免疫力というものをあなどってはいけません。化学薬品で操作できるものではないんです。こつちを操作すればあつちに支障が出る、そういうものなんです。万が一にも研究が進んでなんとかいいものができるとしても、うんと先のことになるでしょう。こんなに早く認可などしちゃいかんです」

そうなることや生薬からできた先生の薬がいちばんになってき

ますね。

「あたりまえです。化学薬品による生態系を崩す開発合戦は、ええかげんにしておけよ！と言いたいです。人の命をなんだと思っているんだと言いたい」

※文中に「免疫療法（効果あり）」としているものは、国立がん研究センターのがん情報サービスによれば、エビデンスが化学的に実証されている免疫療法に関して「効果あり」と記し、他の免疫療法と呼ばれているものと区別しているためです。

SOD様作用食品 体験者の声を お聞かせ下さい。

難病で苦しむ方たちが、少しでも早く良い治療法に行き当たるように、本誌では愛飲者の声を募集しています。お手数ですが、

〒158-0094 東京都 世田谷区
玉川1-15-2 B棟2802

日本SOD研究会 宮城宛

TEL 03-5787-3498

までご一報下さい。

◆丹羽先生診察ご希望の方は

御紹介、御予約いたします。

※自由診療となります。

丹羽メディカル研究所

TEL 0120(731)175

もしくは

日本SOD研究会

TEL 03(5787)3498

まで お電話ください。

●SOD様作用食品とは●

丹羽博士の開発

SODとは、スーパーオキシド・デイスムターゼの頭文字をとったもので「活性酸素」を取り除く「酵素」のことです。

最近、健康の力ぎを握る物質として「活性酸素」と「SOD」の働きと役割がクローズアップされてきました。そして、活性酸素が体内に増加すると、がんや生活習慣病など、さまざまな疾病を引き起こすことが明らかになってきました。

体内に活性酸素が増えても、本来、人間や動物には余分な活性酸素を取り除くSODという酵素が存在していて、病気を防ぎ、身体の健康を守ってくれます。ところが、現代社会の弊害（公害、薬害、食品添加物の害）などが、活性酸素を暴走させていて、体内のSODだけでは追いつかなくなっています。

しかし、残念なことにSODという酵素は分子量が大きいために内服しても胃で破壊され、腸から吸収されません。それを、内服できるように研究されたのが丹羽SOD様作用食品です。

開発した丹羽朝負（耕三）医学博士は、京都大学医学部を卒業し、医学博士として数々の研究が注目を集めていたときにご子息を白血病で亡くされ、それをキッカケにSODの研究を始めました。副作用がまったくないがん治療薬、がテーマでした。開発には実に



二十年もの歳月が必要でした。

「活性酸素をはじめとする免疫学の研究を通して私が知った、自然の摂理」は、私に大自然のメカニズムの精微さと人間の自己治癒力の偉大さを教えてくれました。病気は自分が治すもの、私は、この理想を患者さんの誰もが実現できるように医師の立場から最大限の努力を続けています」

先生は今も、土佐清水病院院長として、毎日、医療の現場でがん、アトピー、膠原病などの難病に苦しむ患者さん達の治療にあたっています。また、SODなどを始めとする論文は海外でも高い評価を得、日本のみならず海外の学会で講演をしたり、大学病院で特別講演をしたりと、多忙な日々を送っています。

幸いなことに最近、西洋医療と東洋医療などを統合した医療へと世の中の流れが向かっています。代替医療に対する関心や認識も高まり、丹羽博士が40年も前から言っていた、本当の意味での人を診る診療の時代です。

この会報は、そんな丹羽博士の志を受け、誰もが自分の力で健康でいられるように、難病で苦しむ方が少しでもなくなるようにとの願いを込めたものです。

SOD研究会からのお知らせ

いつもSOD研究会報をご覧いただきありがとうございます。

最近、特に当研究会へお問い合わせいただくことが多い内容についてお知らせ致します。

「丹羽耕三博士のSOD様食品は金の笠のシールが貼られていれば、どこも同じものなのではないか？」というような、ご質問をよくいただきます。

その回答としましては、金の笠（管理番号付）シールは丹羽免疫研究所で分析・検定し、エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で開発当初から、厳しい品質管理のもとに伝統的な製法で造られる製品だけに貼付される信頼の証（マーク）でした。しかし、ここ数年前より丹羽先生の考えで別の工場で製造されたSOD様食品にも金の笠のシールが貼られ、販売されているものもあります。土佐清水市の工場で製造されたか、そうでないかを見比べる一つの目安が、まず金の笠シールの特徴にあります。

エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で製造されている製品シールの特徴



原寸大 横 30mm、縦 25mm

- 管理番号は 6 桁
※土佐清水で製造された証明の通し番号となっています。
- シール左部分に絵や記号が記載されている
※左部分の表示は製品管理の為、不定期に変わります。
- 他の工場で製造された製品と比べ、原末の味や色、粒の大きさが違う場合などがある